



## ■ センター長挨拶 ■



### 新しいCISMOR VOICEをお届けいたします

同志社大学一神教学際研究センター（CISMOR）のニューズレターであるCISMOR VOICEの体裁が一新されました。前号までの、カラー写真を多く掲載した、デザイン会社制作による上質紙の冊子形式のものではなく、CISMOR事務局スタッフが制作した、手作りのニューズレターとなりました。このような変化の原因は、昨年3月で5年間続いた21世紀COEプログラムが終了したからです。

CISMORは2003年に、21世紀COEプログラムに採択されたのとはほぼ同時に設立され、国内外の多くの皆様のご支援とご助力によって、中東生まれの三つの一神教（ユダヤ教・キリスト教・イスラーム）とその世界についての学際的研究を続けて参りました。21世紀COEプログラムへの皆さまの温かいご支援に対して、心から御礼を申し上げます。

COEプログラム終了後も、同志社大学はCISMORを本学の高等研究教育機構に所属する恒常的な研究センターとして、継続して維持していくことを決定いたしました。また、昨年9月には、CISMORは文科省の「戦略的研究拠点形成支援事業」（「私学戦略」）に採択され、今後、5年間の研究助成金を受けることとなりました。これはCOEと同様に、世界的な水準の研究拠点を形成するための文科省の支援プログラムであり、「一神教とその世界に関する基礎的・応用的研究」というプロジェクト・タイトルの元で、これまでとほぼ同様に、一神教とその世界についての学際的研究を続けることが可能となりました。

CISMORの研究活動費は、「私学戦略」の補助金と大学からの経費を合わせても、COEのほぼ半額となりました。CISMOR VOICEの体裁の変化は、このことに起因しています。しかし、COEが研究と共に大学院生と若手研究者の教育にウェイトを置いたプログラムであったのに対して、「私学戦略」は研究に特化したプログラムですので、CISMORの研究活動のためには十分な活動経費が、今後5年間保障されることとなったと考えおります。

CISMORの研究活動の一つの特徴は、研究成果を日本語・英語・アラビア語の3カ国語で発信しているところにあります。CISMORの学術誌『一神教学際研究』だけでなく、ウェブサイトも3カ国語です。中東や欧米では不可能な、日本においてだから可能であった、三つの一神教とその世界の研究者や宗教家の対話を実現した「国際ワークショップ」の発表・コメント・ディスカッションの全文も、冊子とウェブサイトに3カ国語で掲載してきました。このような研究活動と発信の成果が、いま徐々に実りつつあると実感しています。とくに中東及び東南アジアのイスラーム諸国の研究機関や政府機関がCISMORの存在と活動に注目し、CISMORに対して熱心に協力関係と共同研究を求める提案をしてくれています。アメリカの有力な神学・宗教研究機関のいくつかからも、『一神教学際研究』（JISMOR）の英語版を定期購読したいという要請が届いています。実はJISMORについては、定期購読料の設定をしておらず、早急に対応しなければならないと考えています。

残念ながら、CISMORのこれまでの5年間の活動の期間中に、世界における一神教とその世界間の対立・抗争は減少するどころか、その厳しさを増しています。このような現実の中で、無力感に沈むことなく、一神教についての基礎的な思想・神学的研究を着実に進めつつ、一神教世界の平和と共存を実現するために、極東の日本において、京都から何ができるのかを考え続けていきたいと願っています。益々の、ご支援とご助力をお願いいたします。

同志社大学 一神教学際研究センター長 森 孝一

## ■ プロジェクト概要 ■

### 第1プロジェクト:グローバル化する一神教の思想的研究 代表者:小原克博(同志社大学大学院神学研究科教授)

日本には一神教世界についての地域研究や人類学的研究の拠点はいくつかあるが、思想的・神学的研究を行う拠点は存在しない。しかし、そのような研究が、実際の紛争解決や一神教世界の理解にとってきわめて重要な役割を果たすことを踏まえ、本研究プロジェクトは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの思想的・神学的研究を深めるだけでなく、三者に共有される思想的・神学的課題や争点をより重点的に取り扱っていく。

いずれの一神教も、それが成立した場を離れて、今やグローバルな活動領域を有している。グローバル化の中で不可避免的に直面した近代化、世俗化、西洋思想との対決など、一神教世界を取り巻く思想的課題に対しては、政治思想の側面からも研究を進めていく。また、一神教的な価値が日本社会にもたらした変化や葛藤についても研究対象とする。

三つの一神教は、従来、ユダヤ学、キリスト教神学、イスラーム学として個別に研究されてきた。この三つの一神教は特に近代以降、対立の歴史を繰り返してきた。三つの一神教を「同根の宗教」として把握し、対立ではなく共存を可能にするために、それぞれの神学、法学、哲学、思想を視野に入れた総合的な「一神教研究」の基盤を構築することが、本プロジェクトの研究内容である。その研究遂行のため、ユダヤ学ユニット(責任者:手島勲矢)、キリスト教神学ユニット(責任者:三宅威仁)、イスラーム学ユニット(責任者:中田考)で細部の計画を立てながら、同時に、それぞれが有機的な関係を持つために、「一神教内部における保守派とリベラル派の緊張関係」「一神教世界と世俗化・近代化・ナショナリズムをめぐる諸問題」「日本社会と一神教」といった重点課題を共有していく。

### 第2プロジェクト:多様なものの共存と社会統合 代表者:森 孝一(同志社大学大学院神学研究科教授)

2001年の「9・11」同時多発テロとその後のイラク戦争は、中東生まれの三つの一神教が深く関わっている。またキリスト教世界であったEUは近年、イスラーム系移民の増加によって、民族や宗教における多様性を保障しながら、どのように社会統合を図ればいいのか喫緊の問題となっている。今日の世界が直面しているこのような重要課題に一神教が深く関係しているにもかかわらず、我が国においては「一神教とその世界」を総合的に研究する研究機関は存在していない。

本研究プロジェクトは次の二つの研究部門を設定する。(1)アメリカ研究部門「アメリカの内政・外交に対する一神教の影響」(責任者:村田晃嗣)、(2)EU研究部門「EUとアメリカにおける社会統合と一神教の関係」(責任者:内藤正典)。

(1)アメリカ外交の一つの特徴は、理念が外交政策の決定に大きな影響を与えているところにある。本部門研究は、アメリカのグローバル戦略の宗教的次元を学際的に分析し、世界における多様なものの共存の道を探る。また、内政に大きな影響力を持っている宗教右派や福音派の背景・現状・変化について分析する。

(2)EUの拡大統合路線の成否の鍵を握る社会統合と一神教との関係を究明する。ヨーロッパ社会は今後、世俗主義のヨーロッパvsイスラーム社会、キリスト教保守勢力vsイスラーム社会という二つの対立軸が、社会統合の焦点となる。この点をふまえ、EU研究部門では、多民族・多文化社会の先行例であるアメリカの場合と比較しつつ、EU統合の可能性と限界をEU自身とイスラーム社会の側に理解させ、その上で両者共生の方途を彼ら自身に模索させていくことを最終目標とする。

## ■ 公開講演会報告 ■

一神教学際研究センター主催

### 「宗教間対話の問題点 ―イスラーム理解を中心に―」

日時：2008年7月19日(土) 13:00～14:30

会場：同志社大学 今出川キャンパス  
至誠館32番教室

講師：塩尻和子氏(筑波大学特任教授)

イスラームと宗教間対話を巡る問題と展望を述べるにあたり氏は、まずイスラームにおける現代のグローバリゼーションの意味を検討することから始めた。イスラームは元来セム的三宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラーム)の中では最も多元主義的な宗教として、本来のグローバリゼーションという概念を継承する宗教であった。しかし経済的「困り込み」の性質を備えた今日のグローバリゼーションはアメリカ主導の下、イスラームをはじめとした「他者」を排するロジックになっている。氏は今日のグローバリゼーションがかつての概念へと近づくことが、宗教間対話形成のための道筋の一つだとした。

続いて氏はイスラーム神学思想を巡る「共存」のジレンマについて触れた。イスラームはこの世に信仰者と不信仰者がともに存在することを前提としているが、そのことは神の前で人間が必然的に「不平等」であることを示す。その意味では同じ地域社会で平等な権利と義務の下でともに暮らすという今日的な意味での「共存」と、その信仰者と不信仰者との「共存」との間にはすべからず齟齬が生じる。これはどの宗教にも見られる、深刻な問題である。イスラーム世界の歴史の中で実現した共存体制とは、たとえば「保護民政策」のようにあくまでもイスラームの優位性を認め、その支配が行われるというものである。その意味ではそれは決して「平等な権利と義務」による社会体制ではなかった。

ただし、そのような支配体制が一般市民レベルでのムスリムと異教徒との間に抑圧的な関係を設けたわけではない。また「自宗教の優位性を認識する」という宗教一般に共通した問題を、イスラームの場合にのみ頑迷固陋な性質と見なす世間の指向には、やはりイスラームに対する偏見や誤解が存在しているのだと、氏は指摘する。

このような問題に対し現代の学者達はどのような取り組みを行なっているのか。氏はヨーロッパで活動するターリク・ラマダーン氏を取りあげた。ラマダーン氏はイスラームの一神教概念を表す「タウヒード」(神の唯一性、の意)の本来の意味を「神とともに在ることは、人類とともに在ることである」と説明し、そこにおいてムスリムは最終的に非ムスリムの共同体に対して自らの信仰について証言する義務を負うとした。これは彼が自身の活動本拠地であるヨーロッパにおいて、ムスリムにとってのそこでの課題を「シティズンシップ」とする主張に直結する。ラマダーン氏は移住と共存によって誕生したヨーロッパのムスリムにとって重要なのが、シティズン(市民)としてヨーロッパ社会との関係を築くことだと述べる。

信仰者と非信仰者との差異化を生む宗教の間では、たがいの教義などをあまり知らない方が良いという「非ロゴス的対話」のほうが重要であると説く声もある。しかし「宗教の基盤についての探求なくしては、宗教間の対話はない」とカトリックのハンス・キュンク神父がかつて述べたように、氏は特にイスラームの場合、その偏見と蔑視を削ぐためにも、たがいについての学びを継続する必要があるとして、講演を締めくくった。



CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程  
高尾賢一郎

## 一神教学際研究センター／日本オリエント学会共催 「個人神を通して見たメソポタミアの宗教」

日時：2008年7月26日(土) 14:00～16:00

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館 礼拝堂

講師：中田一郎氏（中央大学名誉教授・元日本オリエント学会理事）

都市毎に多くの神殿があり、複数の神々に対する例祭が行なわれていたことから、古代メソポタミアは多神教の世界であるとよく言われる。そしてメソポタミア出土の史料には、「わたしの神」や「あなたの神」といった、「個人神」とでも呼ばれるべきものが登場する。氏は、紀元前約2000年紀前後のメソポタミア世界の例を挙げながら、個人神というのはどのような神であったのか、当時の人々とどのような関係にあったのかを述べ進めた。

メソポタミアが多神教の世界であったことを教えてくれる史料は、祭祀や司祭に言及した史料、行政文書、書生が残したものなど、多様である。例えばハンムラビの時代、ユーフラテス川沿いにあったマリ王国の犠牲祭に関する史料は、同国でおよそ25の神々の祭祀が維持されていたことを教えてくれる。その一方で、そうした史料は、一般民衆を含めた当時の人々の、個人的な敬神、神々に対する感情の多様さを、垣間見せてくれる。

上に述べたマリの史料には、その文書を書き残した人物に関係した神々の名前が随所に挿入されている。例えば王国の最高神、居住する都市の神、そして個人にとっての神、という三つが、手紙の挨拶文として使われることもあった。そして最後の個人にとっての神が、文書の中では「わたしの神」や「あなたの神」と表現されている、個人神である。個人神はその個人が男性であるか女性であるか、どういう立場の人物であるかによって、異なりを見せる。王には王の個人神が、少女には少女の個人神が存在するのである。したがって個人神は、固有名詞で表されないからといって、無名で地位の低い神々であったとは限らない。個人神は、その個人の立場や願いによって選択されているからである。

個人神は、王国の最高神、居住する都市の神、それらと個人の間に立って、自分のために執り成しをしてくれる存在であった。その役割は護衛兵であったり、顧問弁護士であったり、また主治医であったり、多様である。しかしその個人神が個人の願いを叶えない場合、責任を果たさない場合もあった。古代メソポタミアには、正しい個人が不当、不条理な苦難を被ることについての葛藤、つまり神義論をテーマとした文学的作品が多く見られる。王国の最高神、居住する都市の神とは異なり、個人神は、それを敬う個人と、きわめて密接で具体的な利害関係を持っていたと言える。

古代メソポタミアは、多くの神々の存在が認められ、祭祀が行なわれてきたという点で、疑いなく多神教の世界である。しかし以上に述べてきたように、個人神との密接な関係を通して、人々が個人的な敬神や、特定の神に対する独特な感情を育む土壌がそこにはあった。そうした、多神教と呼ばれる世界の一様でないあり方に着目する面白さと重要性を指摘して、氏は講演を締めくくった。

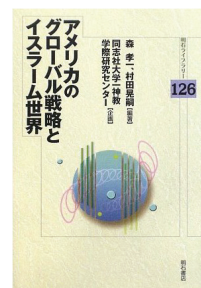
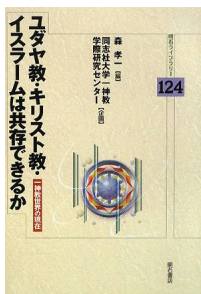


CISMOR リサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 高尾賢一郎

### 【同志社大学 一神教学際研究センターの本】

☞「ユダヤ教・キリスト教・イスラームは共存できるか  
— 一神教世界の現在」(明石ライブラリー124)

「アメリカのグローバル戦略とイスラーム世界」☞  
(明石ライブラリー126)



一神教学際研究センター／神学部・神学研究科共催  
「コンゴと中央アフリカにおける解放戦争とエイズ問題  
—その宗教的背景と国際協力の問題—」

日時：2008年9月27日(土) 14:00～16:00

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館 礼拝堂

講師：フェリックス・U・カプトゥ氏（日本文化研究センター客員教授・元ルブンバシ(コンゴ)大学教授)



ヨーロッパは12世紀以降、かつて暗黒の大陸と呼んだアフリカへの進出を開始した。諸国は現在のモロッコ、ギニアなどを次々と発見、開拓し、会議を重ねた結果アフリカを分割、その行政区画を決定した。その結果コンゴは、1885年に、ベルギー王レオポルド二世の統治下に置かれることになった。

レオポルド二世の統治下、コンゴでは多くの住民がゴム栽培の労働にかり出された。それによって死亡した人の数は一万人をくだらず、生き残った人たちの中にも、ゴムの収穫が少ないことの罰として手足を切断されるなどの被害を受けた労働者がいた。その間、労働に従事していない幼い子どもはミッション・スクールに通ってはいたが、彼らは奴隷として人々を買いにアフリカに来る諸

外国に抗戦するため、将来は兵隊になることを望んだのである。

コンゴを植民地化するためのベルギーの大義は、公式には、精霊信仰や偶像崇拜などに没頭するコンゴを含めたアフリカ大陸へのキリスト教の宣教である。しかし以上からうかがえるように、その実際の理由は、主としてゴム栽培とその収穫であり、その他にもコバルトなどの鉱産資源の採掘や森林の伐採などに住民に従事させた。

そのような歴史を持ったコンゴが、20世紀、ベルギー領からの独立を果たした後に向き合ったのは、悲惨な国内状況であった。当時、教育を受けていた人は国の1割にも満たず、大多数の人は自立、就業する術を持っていなかった。また、独立した時期も悪かった。東西冷戦の渦中にあった当時、コンゴは外国からの支援を受けるにあたって、東西陣営の間での立ち回りにより気を揉まざるをえなかった。内政に関しても、1960年代から独裁政権が相次いだことによって、ベルギー領時代の多くの社会問題が据え置きにされてしまった。

その最たる例は女性の教育事情であり、特にそれはHIV問題として顕現した。具体的な性教育を受けていない、貧しい女性の一部は売春を行なうことになり、更に職を求めてソマリアやエチオピア、またナミビアやアンゴラへと移住を繰り返したことによって、HIVがコンゴ周辺にまたがった深刻な問題として浮上し始めたのである。

氏は講演の最後に、コンゴと日本が教育機関を通じた交流関係を築くことを、近い将来の展望として述べた。講演の内容自体は勿論だが、講演のテーマが実に多岐に渡るものであったということ、また氏の専門が宗教やジェンダーを含む幅広いものであるということが、今コンゴに、世界が協力して取り組むべき多くの問題が存在しているという現実を、何よりも直接に示しているように思われた。

CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程  
高尾賢一郎

一神教学際研究センター主催

「トルコにおける世俗主義：

一にして不可分の共和国85年の歴史は瀬戸際に立つ」



日時：2008年10月4日(土) 13:00~14:30

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館 礼拝堂

講師：内藤正典氏(一橋大学大学院社会学研究科教授)

講演では最初に、トルコが置かれている複雑な背景が説明された。トルコは、地理的には、ヨーロッパとアジアにまたがって多くの国々と接しており、宗教的には、キリスト教世界とイスラーム世界との接点に位置している。周囲には、グルジアやイラン、イラク、そしてシリアなど、中東の不安定な国ばかりがひしめいているのである。建国以来、トルコの政治と社会をめぐる最大の争点の一つは、人口のほとんどがスンニ派のムスリムでありながら、憲法で

採用されている「世俗主義」の原則である。

ふつう日本人は、「世俗主義」ではなく「政教分離」という言葉を使い、これを普遍的な理念のように思っているが、その意味するところは国によってずいぶん異なる。トルコは、建国の父である初代大統領アタチュルクが、近代化を目指し、西洋化政策を打ち出した。政教関係については、フランスにならって、公的領域への宗教の侵犯を厳しく禁止した。個人でも、公的領域に宗教的な象徴や服装を持ち込むことが禁止されたのである。しかし、このようなフランス型の厳格な「世俗主義」を採用したことが、たえずトルコの内政に緊張を与えることになった。

フランスには、カトリック教会が人間の自由を束縛してきた過去があり、それをフランス革命によって克服したという歴史がある。フランスでは、公の存在である国家と教会を徹底的に切り離していくことで、個人が自由を獲得していったのであった。

ところが、イスラームには教会組織がない。ゆえに、世俗主義や政教分離といっても、何と何を切り離せばいいのか判然としない。しかもイスラームでは、神から離れることで人間が自由になるという発想はないし、そもそも神と人間を切り離すことなど想像もできない。したがって一般のトルコ人は、いまだに「世俗主義」が何のことなのか理解していない。

こうした「世俗主義」をめぐる問題を代表するのが、いわゆるスカーフ問題である。ムスリムの女性は、大人になるとスカーフで髪を覆う。髪の毛は性的な意味をもつと考える女性にとっては、「スカーフをとれ」と命じることは人権の侵害に当たる。西洋では、スカーフの着用は、男性が強要するもので女性の権利の侵害だとみなされがちだが、「信仰に基づくスカーフの着用」という視点が抜け落ちている。

しかし、フランス型の厳格な「世俗主義」は、それが個人の信仰や心情によるものであっても、女性が公的領域でスカーフを着用することを許さない。しかも、世俗主義を支持する人たちは、ヨーロッパ志向の人がほとんどで、敬虔なムスリムを、同じ国民でありながら時代遅れな人間だとみなして侮辱的な態度をとった。こうしたことから、トルコの多くの民衆は、世俗主義に対して次第に反発するようになっていったのである。事実、2002年以降になると、選挙でイスラーム政党が勝つようになった。憲法で禁止されているので表立っては言明できないものの、実のところ現在のトルコ政府はイスラーム政党によるものなのである。

こうした政治の動向に最も焦燥感を募らせているのは軍である。軍は、国民国家の近代性を信じる徹底したリアリストの集団であり、「世俗主義」の守護者を自任している。建国の父アタチュルクも軍人であり、西欧列強と戦って独立を勝ち取り、それを守り抜くために軍が果たした力は大きい。そもそも、軍をはじめとしてトルコ国民が近代化のために多大の努力をしてきたこともまた事実であり、近代国家の原則としてきた世俗主義を軽んじることもできない。かくして、イスラームの復興を求める民意と世俗主義勢力の摩擦が高まることになり、建国から85年たった現在のトルコは、歴史の瀬戸際に立つことになったのである。

同志社大学特別研究員 (PD) 藤本龍児

## 一神教学際研究センター／京都ユダヤ思想学会共催 「ユダヤ人と旧ソ連の記憶—文学・宗教の交差—」

日時：2008年12月2日(火) 13:10～16:15  
会場：同志社大学 今出川キャンパス クラーク館チャペル  
講師：ヤコブ・ラブキン氏(モントリオール大学教授)  
「無神論者としてのユダヤ人の創出:ロシア、その他」  
コメント：沼田充義氏(東京大学文学部教授)  
ディスカッション：ヤコブ・ラブキン氏(モントリオール大学教授)  
沼田充義氏(東京大学文学部教授)  
菅野賢治氏(東京理科大学理工学部教授)



本講演においてヤコブ・ラブキン氏は、第二神殿時代以降のユダヤ人のアイデンティティ構築の歴史を概観し、18世紀の欧州に端を発する啓蒙主義思想の影響を受けたロシアこそが、民族的定義に依る「無神論者としてのユダヤ人」という新たな自己理解の創出地であったことを社会史的観点から浮き彫りにした。

ラビ・ユダヤ教の理解によれば、ユダヤの信仰共同体を担い支えているのは、専らトーラーとその教説である。この自己理解は、ユダヤ教を土地や神殿などの地理上の規定から解放し、他所へと移送可能な宗教とした点、またトーラーとその教説にのみ基礎を置くことで政治的野心を総じて放棄し、移住先の支配者と良好な関係を結ぶことを可能にした点で、ディアスポラ以降、今日に至るまで重要な意味を持っている。

キリスト教圏の欧州ではユダヤ人は長らく迫害の対象となってきたが、18世紀から19世紀初頭にかけて啓蒙主義が台頭することで、その状況に大きな変化が生じる。信仰の相違に依らない人間性と、その平等性を唱える啓蒙思想の普及により、ユダヤ人にも他の国民と同等の市民権が与えられた。それはまた宗教の世俗化をも惹起するものでもあり、ユダヤ教内部では改革派ユダヤ教などリベラリズムの潮流を生み出した。

啓蒙専制君主エカテリーナ2世の即位により、ロシア帝国にも啓蒙主義の潮流が波及し、一部ユダヤ人がユダヤ教から離反し始めた。居住地選択の自由が認められていたドイツやフランスとは異なり、農奴制の影響が残存するロシア帝国では、多くの農奴と同様にユダヤ人はユダヤ人居住区に留まらざるを得なかった。その結果、その制限された地域の内部で、正統派ユダヤ教徒と世俗的ユダヤ人との軋轢、緊張関係が他国では見られないほどに高まってゆくこととなる。その際、世俗的ユダヤ人は宗教的要素を退け、言語(イディッシュ語)と土地(ユダヤ人居住区)という民族的要素にアイデンティティの基礎を求めた。ここに民族的自己規定に依拠した「無神論者としてのユダヤ人」が創出されたのである。

この無神論者のユダヤ人は、19世紀末から始まるシオニズム運動の積極的な担い手となってゆく。1881年のロシア皇帝暗殺を契機にポグロムがロシア全土に波及し、ユダヤ人の中では「約束の地」に自民族の国家を建立しようとの気運が高まるが、その初期シオニズム運動の指導的役割を果たしたのは、ユダヤ人固有の領土を獲得し、そこでユダヤ文化を開花させることを悲願とする彼らであった。1920年代から30年代にかけてのソビエト国内での宗教弾圧や第二次大戦後の苦境を経た結果、無神論者のユダヤ人にとって、多大な労苦を負うことなく自民族の文化を保存、発展させることが可能となる安住の地はイスラエルのみとなる。また同時に、イスラエルにおける彼らの文化構築への専心は新たな抗争の火種ともなった。それは、かつてロシア帝国のユダヤ人居住区で生じたものと同じであり、つまりは正統派ユダヤ教と無神論者のユダヤ人との抗争である。この対立は今日のイスラエルにおいてもなお解決を見ていない。

CISMORリサーチアシスタント・同志社大学大学院神学研究科博士後期課程 上原 潔



### 【同志社大学一神教学際研究センターの本】

「ユダヤ人と国民国家—「政教分離」を再考する—」(岩波書店)

【共催】同志社大学 一神教学際研究センター／同志社江大学神学部・神学研究科

アルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学／

在日サウジアラビア王国大使館付属 アラブ イスラーム学院／アブドゥルアジーズ国王研究古文書基金

## 国際シンポジウム

# 「イスラームにおける諸宗教間対話への試み」

日時：2009年1月24日(土) 10:00～18:00

会場：同志社大学 今出川キャンパス クラーク記念館 クラーク・チャペル、新島会館

国際シンポジウムは、同志社大学黒木保博副学長と、サウジアラビアのアルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学スライマン・アブドゥッラー・アバルカイル学長の挨拶によって始められた。そこでは共通して、この国際シンポジウムが、今後の日本とサウジアラビアにおける実り多き対話の出発点になるだろうと述べられた。

アブドゥルカリーム・ハマド・アッサイグ氏は、まず寛容や調和、同胞愛や奉仕の精神など、サウジアラビアの国民性の核となっているイスラームの教義と、日本の国民性の中心となっているサムライの精神には共通する部分が多いことを指摘した。また、サウジアラビアではアブドゥッラー現国王によって「対話文化」が築かれ、それが個人や組織のあいだに浸透し、多くの対話組織がつけられてきたこと、「現代イスラーム研究・文明間対話センター」は、その対話組織の代表的な機関であり、対話と共存の精神を広げるべく、さまざまな努力をしてきたことなどが紹介された。

ムハンマド・ハサン・アルジュール氏は、アブドゥッラー現国王の文明間対話への呼びかけについて詳しく述べた。国王は、文明間対話の前提として次のような基本事項を提示している。①人類の危機への配慮と救済を神に求めることの重要性、②すべての宗教者が出席できる会議、③人類の平等と価値およびモラルの呼びかけ、④知性と叡智をとまなう対話が最善の方法であるということ、⑤過激思想からの挑戦に立ち向かうこと、⑥無知と間違った思想からの挑戦に立ち向かうこと、⑦信頼と確信をもって価値観を共有すること、⑧イスラーム国家のメッセージとして対話を呼びかけること、⑨相違を原因として争ってはならないということ、⑩価値観の喪失と誤解による被害に立ち向かうこと、⑪対話は問題解決のための共通の要素であるということ。これらの基本事項を確認しながら氏は、アブドゥッラー現国王が設立した組織や、実際に参加した会議、そこでの声明などを紹介した。

森孝一氏は、まず同志社大学神学部と一神教学際研究センターが、その研究領域を、キリスト教神学だけではなく、他の二つの一神教すなわちイスラームとユダヤ教にまで拡げているという意味において、世界でも類のない研究機関であることを説明し、これまでにおこなってきた諸宗教間対話の内容を紹介した。同志社大学における対話ที่เขาよりも優れているのは、三つの一神教の研究者が一つの場で仕事をし、継続的に対話をおこなっている点にある。しかも同志社大学がある京都は、日本でもっとも宗教が集まっている場所であり、仏教者との対話も活発に、かつ継続的におこなうことができている。

このような一神教研究を日本において進めることの意味とメリットは、大きくわけて二つある。一つは、日本にたいする貢献であって、それは日本社会において不足している一神教についての正確な情報を提供していくことである。もう一つは、世界にたいする貢献である。日本は、一神教世界における対立と抗争の歴史の外に位置しているため、中立的な研究をおこなうことが可能であり、三つの一神教の研究者が同席し対話できる場を提供することが可能である。

そして、宗教間対話においては、「これから一緒に仲良くしていきましょう」というようなサロニックな対話では不十分であって、互いの相違点をしっかりと認識しなければならない。そのうえで、自分たちの宗教伝統のなかで何が対話を妨げているのか、どのような要素を変革していけば対話や共存を実現することができるのか、ということを考えなければならない。森氏は、以上のことを、これからの宗教間対話で肝要なものとして強調した。

サミール・ヌーハ氏は、写真を用いながら、日本的観点から見たアラビア半島の改革思想の発展について自説を述べた。サウジアラビアの歴代の王は、ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブの思想に基づいて国を治めてきたが、これまで「ワッハーブ派」という言葉は、西洋世界では罪や欠点の代名詞として用いられてきた。そうした見解は改められる時機に来ている。氏は、日本における徳川時代の宗教の役割とサウジアラビアにおけるワッハーブの思想の役割には共通性があるという。たとえば、徳川家康が自らを神格化することにより宗教的基盤を確立しようとしたこととムハンマド・イブン・サウドがワッハーブを保護することにより宗教的正統性を獲得したこと、あるいは神道におけるお伊勢参りとイスラームにおける聖地マッカ巡礼、またあるいは神社におけるお清めとムスリムの礼拝前のお清めなど、である。そして氏によれば、明治維新につながる徳川時代末期の宗教的革新と復興の運動は、サウジアラビア建国につながるワッハーブ運動に通じるものがある。ワッハーブによる「アッラー以外に神はない」という「タウヒード（神の唯一性の信仰）」への呼びかけが、アラビア半島の大部分を統一するうえで大きな役割を果たした。それと同じように、明治維新においては、仏教や神道が日本人の精神を統一する役割を果たした、ということである。ワッハーブの思想は、現在のサウジアラビア王国の指導者も支持し続けており、それがイスラーム改革運動につながっている。現在のイスラームを理解するためにも、ワッハーブの思想と意義を正しく理解しなければならない。

最後に氏は、イスラームにおける慈悲は決してムスリムだけに向けられたものではなく、全世界に向けられたものであり、そうであるがゆえにアブドゥッラー国王は、対話と寛容の必要性を全人類に呼びかけているのだということを強調し、発表を終えた。



## 公開シンポジウム&研究会 「アメリカ大統領選と宗教勢力」

日時：2009年1月31日(土) 13:00~18:00

会場：同志社大学 今出川キャンパス クラーク館チャペル、至誠館3階会議室

講師：久保文明氏(東京大学大学院法学研究科教授) 「2008年アメリカ大統領選挙における宗教」  
中山俊宏氏(津田塾大学学芸学部准教授) 「政治と宗教の新たな関係:変貌を遂げる福音派」



久保文明氏は、マクロの視点から「2008年のアメリカ大統領選挙における宗教」の役割を分析し、その全体像を描いた。一般的に、共和党と民主党の対立軸は、経済政策においては大きな政府か小さな政府かということ、支持者の人種としてはWASPかWASP以外かということなどがよく言われるが、もう一つ重要な対立軸があって、それは、ほとんど教会には行かない「世俗派」か、熱心に宗教を信じる「信仰派」かというものである。

今回の投票傾向を、ニューヨークタイムズの出口調査によって分析してみると次のようなことがわかる。全投票者の42%を占める「白人のプロテスタント」の票は、共和党がダブルスコアに近い数を獲得。19%を占める「白人のカトリック」の票は、共和党がややリード。2%を占める「ユダヤ人」の票は、圧倒的に民主党が獲得。38%を占める「ボーンアゲイン(宗教的生まれ変わりを体験した)もしくはエヴァンジェリカル(福音派)のクリスチャン」の票、そして40%を占める「少なくとも一回は教会に行く人びと」の票は、圧倒的に共和党が獲得。こうした数字からも、民主党と共和党が宗教によって対立しているということは明らかといえる。

しかし、これまでに比較して、今回の選挙に特徴的なこともなくはない。例えば、民主党も、信仰心の篤い人びとからの票をやや伸ばし、善戦したこと。また白人の福音派でも、民主党に投票した若者が増えているということ、などである。とはいえ今回は、経済問題が中心的な争点になった選挙だったので、こうした結果をもって直ちに宗教的対立が緩和された、とは言いにくい。ただ、オバマ大統領は、大統領就任式で多様な背景をもつ宗教指導者を採用したり、人工妊娠中絶の件数そのものを減らす政策を講じたりして、宗教的対立の争点の解消をはかろうとしているようである。

中山俊宏氏は、今回の大統領選挙における「福音派の変貌」について分析し、政治と宗教の関係が変化しつつあるのではないかと主張した。今回の選挙では、経済問題が中心的なファクターとなり、宗教問題は全体としては後景に退いた。しかし、民主党と共和党の間の「ゴッド・ギャップ」がなくなったわけではなく、依然として共和党の方が宗教票をおさえているという構図は変わらない。



民主党は、今回の選挙に勝つためには信仰について語らなければならないという認識をかなりはっきりもっていた。実際、バラク・フセイン・オバマは、「ボーンアゲイン・リベラル」と呼ばれることもあるように、従来の信仰と距離をおくリベラルとは異なり、自身の信仰についてごく自然に語る事ができた。その中で、彼は信仰の多様な在り方について語った。そうしたところにオバマの強みがあったといえる。それとは対照的に共和党のマッケイン候補は、福音派からしっかりした支持を取りつけることはできず、今回の選挙では、宗教票の重要性が相対化されてしまった。

こうした変化を理解するには、近年における福音派の変貌について考えなければならない。その変貌とは、第一に、福音派の台頭を支えた第一世代の指導者たちが、高齢化によって影響力を失ったり、他界して表舞台から退場したりしたことが挙げられる。これにともない、第二世代のリーダーや彼らに共感する若い世代の福音派が、第一世代とは異なる問題、すなわち貧困やエイズ問題、アフリカにおける人道危機、さらには地球環境問題などに関心を向けるようになったことである。かれらは、中絶反対という立場を変えたわけではないが、福音派の信仰が「不寛容」や「排他性」の最たるものだと見られることに対して違和感もち、そのため、よりいっそう包括的に「プロライフ(命の側に立つ)」という姿勢を貫いていこうという意識を持ちはじめたのだと考えられる。

氏は、こうした新しい世代の福音派の問題意識は、権力志向が弱く、残念ながら現実のアメリカ政治を変えていく力をもたないのではないかと。それはむしろ政治と一歩距離をおこうとしているように見える。ただ、こうした問題意識をもつ勢力が増えていけば、従来のように宗教勢力がどちらかの政党に密着するということはなくなるかもしれない、という展望を示した。

同志社大学特別研究員 (PD) 藤本龍児

## 公開講演会&amp;研究会

## 「最近のコーカサス情勢

## —政治変動、民族紛争、宗教、グルジア紛争の影響などを中心に—

日 時： 2009年2月14日(土) 13:00~18:00

会 場： 同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂・扶桑館2階マルチメディアルーム1

講 師： 廣瀬陽子(静岡県立大学国際関係学部准教授)



コーカサスは、その地政学的位置と天然資源が豊富なカスピ海を擁することから、大国にとっての戦略的重要拠点であり続けた。しかし同地域は多くの民族、宗教、言語、文化が交差する地域で、またロシアの影響力も根強く残っており、その安定、民主化は容易ではない。特に宗教に関しては、ソ連時代の終焉を機に、それまで禁じられていた特定宗教の活動、意識の復興が見られ、国境と重ならない紛争が多数勃発することになった。講演は、そういったコーカサス地域の複雑な地政を読み解いた上で、同地域の安定が今後どのように見込まれるのかという点を述べ進めるものであった。

とはいえ、グルジア紛争を始めとする、コーカサスが昨今迎えた混乱は、石油のような天然資源をめぐる国際政治問題の中に位置づけられるものである。それは同地域の外交政策が特に、アメリカ、ロシア、そしてEUとの間で揺れている

ことから窺うことができる。例えばロシアから独立した後のコーカサスの諸国家の多くは、ロシアの影響力を排除し、欧米・東欧との協力関係構築を目指した。しかし結果として、そのことはロシアとアメリカの覇権闘争を誘発し、アゼルバイジャンがロシアとコーカサスとの仲介役を買って出る二重外交や、ロシアに依存するしか選択肢のないアルメニアが孤立するなどの混乱を招くことにもなった。それに加え、コーカサスに多大な関心を抱くEUは同地域の諸国家のNATO加盟やWTO参加を始めとする軍事、経済面での協力関係の構築を奨励し、それがグルジア紛争の原因の一つともなった。

そのような中、2008年にはアゼルバイジャン、アルメニア、グルジア、ロシアで大統領選挙が行なわれ、各国は新政権の下で、内政と外交との間で更なる板挟みの状態に陥った。グルジア紛争は、ロシアとグルジアの新大統領による政策路線の打ち出しと、従来から見られたエネルギー開発、その輸送ルート確保、また民主化革命といった問題が絡み合う中で起こった、コーカサスの複雑多様な背景を反映する典型的な出来事であった。紛争によって黒海はロシアとNATOとの覇権争いの場となり、当のグルジアの内政は混乱を極めた。また世界規模の金融危機とも重なり、経済面に見られた混乱も大きい。

グルジア紛争後、関係諸国家の多くはコーカサスの安定を望み、アメリカ、ロシア、EUといった従来のパートナー候補に加え、トルコやイランがコーカサスと世界との仲介役として名乗りを挙げ始めた。しかしトルコのイニシアティブはEUの期待の下で、またイランのイニシアティブは反欧米政策に基づいたコーカサス・中央アジアでの地域影響力強化への指向の下で行なわれていることもあり、むしろこれまでの覇権闘争を更に複雑多様化させた。そうした中、グルジアに関して言えば、ロシアとの間にキリスト教・正教を通したパイプがあることが、数少ない光明の一つだと言える。グルジア正教には、ロシア首脳とコンタクトをとることが可能なイリヤ総主教がおり、またソ連時代には、グルジア正教会がロシアやウクライナの宗教家を育ててきたという背景もある。

複雑な地域性を持つコーカサスでは、今日、これまで以上に諸国家がバランス外交に尽力し、生き抜くことが求められている。しかし講演者は、先述したような宗教ネットワークへの期待も、紛争後のグルジアを始めとした同地域での和平構築に残された道であることを示唆し、講演を締めくくった。

CISMORリサーチアシスタント同志社大学大学院神学研究科博士後期課程  
高尾賢一郎

## ■ 2008年度活動報告 ■

### 2008年

7月19日

公開講演会

「宗教間対話の問題点—イスラーム理解を中心に—」

発表：塩尻和子（筑波大学特任教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 至誠館32番教室

7月26日

一神教学際研究センター／日本オリエント学会共催

公開講演会

「個人神を通して見たメソポタミアの宗教」

発表：中田一郎（中央大学名誉教授・元日本オリエント学会理事）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

9月27日

一神教学際研究センター／神学部・神学研究科共催

公開講演会

「コンゴと中央アフリカにおける解放戦争とエイズ問題—その宗教的背景と国際協力の課題—」

発表：フェリック・U・カプトゥ（日本文化研究センター客員研究員・元コンゴ大学教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

10月4日

一神教学際研究センター主催 公開講演会&研究会

「トルコにおける世俗主義：一にして不可分の共和国85年の歴史は瀬戸際に立つ」

発表：内藤正典（一橋大学大学院社会学研究科教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

12月2日

一神教学際研究センター／京都ユダヤ思想学会共催

公開講演会

「無神論者としてのユダヤ人の創出：ロシア、その他」

発表：ヤコブ・ラブキン

（モントリオール大学歴史学部教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス クラーク記念館  
クラーク・チャペル

### 2009年

1月14日

研究会

「Arabic and Hebrew in Medieval Times: a Unique Symbiosis」

発表：ヴォウト・フォン・ベックム

（グローニンゲン大学教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 至誠館3階会議室

1月24日

公開シンポジウム

「イスラームにおける諸宗教間対話への試み」

会場：同志社大学 今出川キャンパス クラーク記念館

クラーク・チャペル

新島会館

1月31日

公開講演会

「2008年アメリカ大統領選における宗教」

発表：久保文明（東京大学大学院法学研究科教授）

「政治と宗教の新たな関係：変貌を遂げる福音派」

発表：中山俊宏（津田塾大学学芸学部准教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

2月13日

一神教学際研究センター／神学部・神学研究科共催

公開講演会

「イスラーム社会におけるインドネシアのキリスト教」

発表：ジャン・S・アリトナン

（ジャカルタ神学大学学長）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

2月14日

一神教学際研究センター／神学部・神学研究科共催

公開講演会

「最近のコーカサス情勢—政治変動、民族紛争、宗教、グルジア紛争の影響などを中心に—」

発表：廣瀬陽子（静岡県立大学国際関係学部准教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 神学館礼拝堂

### 【今後の予定】

2月18日

第1プロジェクト 第1回研究会

テーマ：「グローバル化する一神教の思想的研究」の目的と課題

発表：中田 考（同志社大学大学院神学研究科教授）

三宅威仁（同志社大学大学院神学研究科教授）

手島勲矢（同志社大学大学院神学研究科教授）

会場：同志社大学 今出川キャンパス 扶桑館

マルチメディアールーム1

2月28日

一神教学際研究センター／日本オリエント学会／

神学部・神学研究科共催

公開講演会

「古代メソポタミアの神話と宗教

—『ギルガメシュ叙事詩』の魅力を中心に—」

発表：月本昭男（立教大学文学部教授・

日本オリエント学会会長）

会場：同志社大学 今出川キャンパス クラーク記念館

クラーク・チャペル

## ■ 来訪者記録 ■

日付	氏名	所属機関	国名
2008年 7月26日	中田一郎	中央大学名誉教授 元日本オリエント学会理事	日本
9月27日	フェリックス・U・カプトゥ	日本文化研究センター客員教授 元ルブンバシ（コンゴ）大学教授	コンゴ
12月2日	ヤコブ・ラブキン	モントリオール大学教授	カナダ
1月14日	ボウト・フォン・ベックム	グローニンゲン大学教授	オランダ
1月24日	スライマーン・アブドゥッラー・アバルハイル	アルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学学長	サウジアラビア
	ムハンマド・ハサン・アルジール	アラブ・イスラーム学院学院長	サウジアラビア
	アブドゥルカリーム・ハマド・アッサーイグ	現代イスラーム研究・文明間対話センター所長	サウジアラビア
	アブドゥルラフマーン・ハマド・アッダーウード	アルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学副学長	サウジアラビア
	イブラーヒーム・ムハンマド・アルマイマン	アルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学学長顧問	サウジアラビア
	アブドゥルアジーズ・アブドゥッラー・アルジュムア	アルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学事務局長	サウジアラビア
	ハーリド・アブドゥルラッザーク・アッダーイル	アルイマーム・ムハンマド・イブン・サウド・イスラーム大学学長室長	サウジアラビア
	サクル・スライマーン・アルクラシー	サウジアラビア王国大使館二等書記官	サウジアラビア
	イサーム・ブカーリ	サウジアラビア王国大使館文化部文化アタッシュェ	サウジアラビア
	ムハンマド・A・アルジャンドゥール	サウジアラビア王国大使館商務官	サウジアラビア
	ムハンマド・アルムフセン	アラブ・イスラーム学院財務・管理部部長	サウジアラビア
	スルターン・アルハルビー	アラブ・イスラーム学院秘書	サウジアラビア
	鈴木 健	アラブ・イスラーム学院広報室長	日本
	前野直樹	日本サウディアラビア協会事務局長補佐	日本
徳永里砂	アラブ・イスラーム学院研究員	日本	
サラマ サルワ	通訳	日本	
2009年 1月31日	久保文明	東京大学大学院法学研究科教授	日本
2月14日	廣瀬陽子	静岡県立大学国際関係学部准教授	日本

発行 同志社大学 一神教学際研究センター（CISMOR）  
〒602-8580

京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL 075-251-3972

FAX 075-251-3092

E-mail: info@cismor.jp

http://www.cismor.jp

編集 CISMOR事務局編集部

執筆協力 高田 太

印刷 中西印刷株式会社